

高橋伸夫・菊地俊夫・根田克彦・山下宗利編：『都市空間の見方・考え方』古今書院，2013年6月刊，159p., 3,500円（税別）

本書の筆頭編著者である高橋は、本書の内容を「都市空間を主たる研究対象としていかなる人文地理学的な見方や考え方が可能であるかを掘り下げたもの」と記している(p.154)。この目的からは、都市に関する理論や研究手法を議論するいわゆる教科書的な書物が想像されるが、本書は、都市空間の分析事例を豊富に盛り込んでおり、そのことにより初学者でも実際の分析手順や考察をより明確に理解することができる。この点が本書の大きな特色となっている。

本書は3部構成となっている。第Ⅰ部（第1章～第5章）は都市空間の見方・考え方に関する概念や手法の概説であり、国内の事例を紹介した第Ⅱ部（第6章～第15章）、海外の事例を示す第Ⅲ部（第16章・第17章）から構成される。

評者は都市地理学を専門とするわけではないが、本書が対象とする初学者代表という気持ちで、刊行されたばかりの本書について速報的に紹介したい。

本書は、既に紹介したように3部から構成されるが、各部の扉ページにはそれぞれの内容に関わる景観写真が掲載されている。その写真から何を読み取ることができるか、簡潔な説明も添えられており各部の導入として効果的である。このページだけでもカラー印刷であれば、よりイメージがわくのでは、と惜しまれる。

第Ⅰ部「都市空間の調査研究法」は、3名の編著者（菊地、根田、山下）による都市空間に関する理論や調査法の説明であり、いわば理論編と位置づけられる。

第1章「都市空間の概念と類型」では、都市の成長が簡潔に説明された後に、地理学から都市への

二つのアプローチが説明される。すなわち、都市の分布や都市間の結びつきに焦点を当てる都市システム的なアプローチと、都市の内部構造を解明し都市の特性を明らかにするアプローチである。そのうえで、都市地理学の特長を都市の詳細な実態把握とともに空間的な広がり注目することと説明している。

実態を把握するために不可欠な調査手順を詳細にまとめたのが第2章「都市空間の描き方」である。研究テーマの設定法、統計や地図等の基本データの収集、収集データの地図化の手法、および調査結果のとりまとめの方法が、コンパクトに述べられている。撮影した写真を利用する際の注意事項も説明されるなど、近年の個人情報保護意識の高まりにも配慮した実践的な記述である。

第3章「都市空間と土地利用・景観」では、都市空間を把握する重要な手法である土地利用分析が紹介される。まずマクロスケールの分析例として、北京市南部の土地利用に関する事例が提示される。ここでは土地利用図を2kmメッシュに分割しドットサンプリング法と修正ウィーバー法によって土地利用の結合型が求められている。さらに、ミクロスケールの分析例として、成田山新勝寺門前町の商店街調査における土地利用調査にもとづく分析例が提示される。どちらも、単に土地利用図を示すのみでなく、過去の土地利用図を作成し現在と比較・考察することによって地域の変化やその要因を明らかにしている。土地利用分析において空間的な変容のみでなく、時間的な変容を分析する重要性を指摘している。

第4章「都市空間の形成プロセスと変化」は、都市の変化を読み解く手法が解説される。まず都市システムに関する説明と、その変化を示す一例として順位規模グラフの変化が紹介される。都市の内部構造に関しては、ベルグとクラッセンの都市の発展段階モデルを示した上で、CBDと郊外が

どのように変化したのか丁寧に解説される。さらに都市の内部構造変化の中で生じるインナーシティの変化を説明し、日本では、欧米ほどインナーシティ問題が顕著でないが、中心市街地の衰退や再生が大きなテーマであると指摘している。

第5章「都市空間のパターンとモデル化」は、都市をどのように理解するのか、という点が改めて議論される。ここでは、都市の定義が国によって異なることや、行政界としての都市と実態としての都市の乖離（アンダー・バウンデッドあるいはオーバーバウンデッド）が指摘され、形式的な市域と実質的な都市を区別し、それに応じたデータの準備が都市間比較において重要であることが強調される。また都市の理解に関連して、人間の都市空間の認知という点からメンタルマップの議論が紹介される。その上で、都市空間をどのように読み解くか都市空間の性格や都市の形態に関する議論が整理される。

第I部で強調される詳細な実態把握の重要性を踏まえ、第II部および第III部は、都市空間分析の事例が提示される。各章では、第2章で紹介された様々な調査技術が活用され、提示される図表は、調査結果の表現に関する良いサンプルである。第II部以降の内容を詳細に紹介すると冗長になるので、ここでは、第I部との関係に留意しながら簡単にまとめておく。

まず第6章「都市近郊における土地利用の見方・考え方－前橋市近郊の養蚕農村の事例－」および第7章「都市的土地利用の見方・考え方－金沢市中心部における都心化の地理学的研究」は、第3章で紹介された土地利用分析の実践例である。第6章は、前橋市における100mメッシュの土地利用データを用いて土地利用変化を分析し、その分析を踏まえて抽出された事例地区における土地利用調査から、前橋市近郊の農村における土地利用変化の特長を明らかにしている。一方第7章は、

都心部における土地利用調査および分析の事例である。高層化の進む都心部を対象とするため、1階部分のみでなく3階、6階の利用も調査し、さらに土地所有者についても併せて考察することで、水平方向の構造と垂直方向の構造と特長を明らかにしている。

第8章「金融機能と都市システム」は、第1章および第4章で取り上げられた都市システムに関する分析である。都市の金融機能の指標として預貸率を用い、日本の主要都市について分析した結果、厳格な都市システムが存在していることを指摘した。

続く第9章・第10章は、都市の機能や内部構造に関わる事例として、都市の工業機能および商業機能に注目した分析である。第9章「都市における工業立地の見方・考え方－大都市圏周辺工業都市の一類型として－」は、東京大都市圏北東部の工業都市の事例として茨城県石岡市を取り上げ、工業の発展と地域的性格を検討している。工業団地が造成され外来工場や誘致工場の進出が見られたが、各工場は生産の管理・制御機能を持たず、京浜地域などの大都市にある本社の意思決定に支配されていることが示される一方で、労働力の需給という点では近隣市町村と強く結びついていること、受注関係の分析からは北関東工業地域での緩やかな機能分担がなされていることも明らかとなった。

第10章「都市における商業の土地利用の見方・考え方－須坂市中心市街地における商業機能の変容－」は、長野県須坂市の中心市街地における商業機能の変容（縮小傾向）と、そのような状況における商店の対応を、土地利用調査および聞き取り調査から検討している。これは、第4章で指摘された中心市街地の問題を明確にした分析である。

続く第11章および第12章は都市居住者の生活

や文化に関する事例である。第2章において指摘された、居住者の様々な活動パターンを図化し分析する手法を用いることで、都市の特徴を明らかにしようとしている。第11章「生活空間の見方・考え方－鉾田町における住民の生活行動圏－」は、茨城県鉾田町において農村部と中心市街地の住民の日常生活を分析することによって、モータリゼーションの進展によって生活行動圏が大きく変化したことを明らかにしている。第12章「都市空間における文化地理学の研究－福島市における祭礼空間の変容の事例－」は、講組織や宗教儀礼等が衰退する中で、一部の祭礼等が観光行事化し、地域おこしの観光資源として捉え直されていることを明らかにした。

第4章において指摘された、中心市街地の衰退や再生に関する事例が第13章および第14章である。第13章「都市空間におけるまちづくりの研究－水戸市中心市街地における商業地域構造と地域活性化－」は、茨城県水戸市における商店街の形成と近年における活性化を分析している。活性化に向けて様々な取り組みがなされているにもかかわらず、それらが有機的に連動していないことを指摘している。多くの人や組織が集中する都心部故の問題点と言えよう。第14章「都市空間におけるツーリズムの研究－古河市における中心市街地の変容と都市観光への取り組み－」では、茨城県古河市において、城下町という歴史的遺産を活用した中心市街地の活性化を検証している。歴史的資源および観光ボランティアという人的資源の結びつきによる都市観光の可能性を指摘している。

第Ⅱ部最後の章となる第15章「都市空間における交通流動の研究－長野県諏訪圏域における旅行速度を用いた自動車交通アクセシビリティおよび交通環境測定の試み－」は、地域間の流動現象からアクセシビリティ（近接性）を求めることにより、都市空間の交通環境を明らかにしたものであ

る。計量的な手法を用いた都市空間の分析例である。

第Ⅲ部「外国における都市空間の見方・考え方」は、フランスのパリ市(第16章)およびリヨン大都市圏(第17章)の分析事例である。第16章「パリ市における居住空間の特質」では、パリ市の街区単位で集計された住宅や住民属性に関する統計データに因子分析およびクラスター分析を行い、パリ市の地域構造を検討している。パリ市では、住宅の質が居住空間の特性を規定する大きな要因となっていることを明らかにしている。第17章「EU統合下におけるリヨン大都市圏の構造変容の事例」では、人口分布や人口増加率、外国人人口割合、産業別人口等の人口データからリヨン大都市圏の構造を示した上でリヨン大都市圏の発展に関わる問題点を検討している。

本書の概略はこの通りであるが、先に触れたとおり事例の豊富さが際立つ。一般的な教科書であれば事例を示す場合でもごく一部しか触れることができず、ポイントのみが記される場合も多い。しかし本書では、テーマの設定から分析・考察に至る議論全体が収録されているため、都市をいかに分析しよう読み解くかを、しっかりと読みとることができる。また土地利用から祭礼空間、アクセシビリティに至るまで都市空間に関わる様々な現象が取り上げられており、都市地理学の幅広さも理解できる。また、そのような幅広い内容であっても、フィールドワークを行い、地図に描いて考察する、という基本的な手法を用いることで理解できることも、改めて痛感させられる。

本書が念頭に置いている初学者はもとより、地理学という学問の特長を改めて考えることのできる良書であると思われる。

いくつか、気になった点を上げておきたい。実践編としての第Ⅱ部および第Ⅲ部であるが、取り上げられている事例(章)そのものは、詳細な

フィールドワークに基づいた調査と分析でありいづれも大変興味深い内容である。これらの事例の選択や掲載順には、編著者の意図があると思われるが、本文にはそのような説明がなされていない。初学者を念頭に置いていることを考えると、各部の冒頭に、各章の位置づけや注目すべきポイントを明示すれば、読者の理解も一層深まるのではないだろうか。

また、収録されている事例の多くは、高橋を中心とする共同調査の成果として筑波大学の『人文地理学研究』や『地域調査報告(現地域研究年報)』に収録されたものであり、中には1980年代の調査・初出のものもある。1980年代から現在までには、政治、経済、社会情勢など様々な点で大きな変化が生じ、都市も大きな影響を受けたことは言うまでもない。しかし本書では「最新のデータを用いて研究結果を補完できず、今現在の姿を忠実に描くことができなかった」(154ページ)という。できれば、調査後の変化や現状などを説明する補足的な文章がわずかでもあれば、本書の内容をより深く理解することが可能となったのではなかろうか。

ここまで書いてきてふと考える。高橋が、あえて上のように記し本書の限界を示したのは、フィールドとともに調査し薫陶を受けた人々(特に本書の執筆陣)に対するメッセージではないだろうか。最新のデータや手法を用いて、都市の現状を把握する。そして、本書に収録された事例と比較考察することで都市空間の一般性の解明を目指すこと。そのような次のステージへ向かう出発点として、本書は意味があるのかもしれない。

(平井 誠)